還暦 澤孝子（さわたかこ）

99年はウサギ年。澤孝子は還暦を迎える。芸歴は45年を数える。浪曲界の浮沈の鍵を握る《芸豪》に抱負を聞いた。

「年女ですよね。還暦になって、とてもうれしいんです。母は61、父は59で逝き早死にでしたので、子供の私としては親孝行になると思っています」

浪曲界に入って45年たちました。

「はたから見たら苦労でも私には身になる勉強でした。好きな浪花節が続けられてよかったですよ」

浪曲が根っからお好きなんですね。

さわ　たかこ。一九三九（昭和14）年8月14日、千葉県銚子うまれ。師匠は二代目・廣澤菊春。一席の舞台に命をかける熱演派だ。

「好きなんです。浪花節のおかげで今の私があるんです。さまざまな人たちとの出会いがあり、縁ができました。豊かな人脈ができ、経験や知識が増えて新しい活動の場が生まれ、未知の分野にもチャレンジできるんですね」

最近、3人目の弟子ができました。

「師匠・菊春のおかみさんの許可を得て私の前名・菊奴（きくやっこ）とつけました。声の幅が広く芸の考え方がしっかりしています。今は師匠のネタの『大山詣り』を学ばせています」

順子さんと恵子さんは、どのように育てたいのですか。「順子は大柄で声が良くスター性があります。雲月ぶしをマスターさせたいですね。恵子は師匠のような笑いのあるネタを十八番にさせたい。恵子の息子さんが狂言の和泉流の狂言師なの。親子競演で笑いの会ができれば素晴らしいですね。弟子自慢に聞こえるでしょうが、お客様に芸を見せても恥ずかしくないように厳しく稽古はさせています」

澤さんは外に向い直言するだけに、自分にも厳しいようにみえます。

「怠けていられないんです。なにか言う以上、相応のことをしなければなりません。まずは自分が手本にならないと」

大西信行氏を精神的支柱として、弟子だけでなく作家、曲師と多くのスタッフが澤さんを支えています。

「現代を語る浪曲台本を新しい作家たちが書こうとして、その涌井和夫さんや市川俊夫さんが大西先生についてがんばっています。三味線は佐藤貴美江がプロ根性を身につけ、21世紀の三味線を弾く努力をしています。私と伊丹秀敏さんの演ることを懸命に譜に取り身につけてくれています」

大西信行氏を中心にして作家、曲師、弟子たちが力をつけてきた澤孝子「軍団」。右から澤順子、大黒柱の大西信行氏、孝子、恵子、手前が佐藤貴美江

新作をたえまなく開拓する意欲、高い観客動員力、弟子の育成、スタッフの充実。いまは浪曲以外の需要にも応えられるようになった。

「平成10年の8月に、日本舞踊の西川鯉蔵さんが私の『雪おんな』を踊り、私が浪花節を読むという試みを行ない成功しました（平成11年に再演）。還暦を迎え、これまで蓄えてきた技や経験が他芸の中でも使いこなせるようになりました。そんな自分を私自身、楽しみにしながら見ていきたいと思います」

ウサギ年であっても澤孝子は千里をかけ、胸に大望を抱いた虎だったのだ。

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。
浪曲家の皆さん…頑張って下さい。
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉